O・ヘンリ短編集（三）

大久保康雄訳

新潮文庫

新潮文庫

O・ヘンリ短編集

（三）

O・ヘンリ

大久保康雄訳

新潮社版

1813

Author : O. Henry

O・ヘンリ短編集（三）

新潮文庫　オ－2－3

昭和四十四年四月十日発行
昭和六十三年七月二十五日四十二刷改版
平成七年十一月三十日五十八刷

訳者　大久保康雄

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部（〇三）三二六六－五四四〇
読者係（〇三）三二六六－五一一一
振替　〇〇一四〇－五－八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・三晃印刷株式会社　製本・株式会社大進堂
© Misaki Ôkubo 1969　Printed in Japan

ISBN4-10-207203-9 C0197

目次

最後の一葉……七
愛の使者……一九
一ドルの価値……二七
天窓のある部屋……四一
ブラックジャックの売渡し人……五五
煉瓦粉長屋……八三
伯爵と婚礼の客……九九
にせ医師物語……一一三
人生の回転木馬……一二九
釣りそこねた恋人……一四一

心と手……一五三
黄金の光……一五九
都会の敗北……一七五
荒野の王子さま……一八七
都市通信……二〇五

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

新潮文庫

O・ヘンリ短編集

（三）

O・ヘンリ

大久保康雄訳

新潮社版

1813

目次

最後の一葉……七
愛の使者……一九
一ドルの価値……二七
天窓のある部屋……四一
ブラックジャックの売渡し人……五五
煉瓦粉長屋……八三
伯爵と婚礼の客……九九
にせ医師物語……一一三
人生の回転木馬……一二九
釣りそこねた恋人……一四一

心と手……一五三
黄金の光……一五九
都会の敗北……一七五
荒野の王子さま……一八七
都市通信……二〇五

O・ヘンリ短編集

（三）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

最後の一葉

ワシントン・スクエアの西の小さな区域では、いくつもの通りが乱雑に錯綜して、「プレース」と呼ばれる小路に寸断されている。これらの「プレース」は奇妙な角度と曲線をもっていて、一本の通りが、一度や二度は、それ自身と交叉したりしているのである。かつて、ある絵描きが、この通りに、一つの貴重な可能性を発見した。絵具や紙やカンヴァスの代金をあつめにきた集金人が、この通りへはいりこんで、分割払いの一セントももらわないうちに、帰ってくる自分自身とばったり出っくわしたとしたら、どうだろう？

やがてこの一風変った古めかしいグリニッチ・ヴィレッジに絵描きどもが集ってきて、北向きの窓と、十八世紀風の破風と、オランダ風の屋根裏部屋と、安い間代を求めて、うろつきはじめた。ほどなく彼らは六番街から白鑞製のコップや卓上用の焜炉を、いくつか買いこんできた。そして、ここに「芸術家の村」ができあがったのである。

ずんぐりした煉瓦づくりの三階建のてっぺんに、スウとジョンジーはアトリエをもっていた。「ジョンジー」というのはジョアンナの愛称である。スウはメイン州、ジョンジーはカリフォーニア州の出身だった。二人は八丁目の食堂「デルモニコ」で定食を食べているときに知り合い、芸術の上でも、チコリ・サラダやビショップ・スリーヴ型のドレスについても、好みが一致しているのを知って、共同のアトリエをもつことになったのである。

それは五月のことであった。十一月になると、医者が「肺炎」と呼ぶ冷酷な目に見えない

侵入者が、この「芸術家の村」をうろつきまわり、その氷のような指で、あちらこちらの人をなでてあるいた。この破壊者は、向うの東側では、傍若無人にのしあるいて、犠牲者を何十人と束にしてうち倒したが、この狭苦しい苔むした「プレース」の迷路は、そっとした足どりで通り抜けた。

この肺炎氏は、とても騎士道的な老紳士といえるような代物ではなかった。カリフォーニアの軟風で血の気の薄くなった、ちっぽけな小娘は、血まみれの拳を握りしめ、息づかいも荒々しいこの老いかさま師にとっては、正面から堂々と攻撃するに価する獲物ではなかった。それなのに奴はジョンジーに襲いかかったのである。ジョンジーは、ほとんど身動きもせずに、ペンキを塗った鉄製のベッドに横たわり、小さなオランダ風の窓ガラスごしに、となりの煉瓦づくりの家の、窓も何もない壁を見ているだけであった。

ある朝、忙しそうな医者が、もじゃもじゃのゴマ塩の眉毛で合図をしてスウを廊下へ呼びだした。

「助かる見込みは――まず十に一つといったところだな」と彼は体温計の水銀を振っておろしながら言った。「その見込みも、あの娘が生きたいと思わないことには、どうにもならん。いまのように、葬儀屋を呼ぶことばかり考えてるようでは、どんな処方も役には立たん。あんたのお友達は、なおらないものと自分できめこんでいる。気持の上で何かこれと打ちこめるようなものはないかね？」

「あのひとは――いつかナポリ湾を描きたいと言っていましたわ」とスウは言った。

「絵を描くって？――ばかな！　何かじっくり考えるだけの値うちのあるものを心に抱きつづけているというようなことはないのかね？――たとえば、恋人であるとか……」

「恋人？」とスウは、ユダヤ・ハープの音のような声で言った。「恋人なんかにそんな値うちが――いえ、先生、そんなものはありませんわ」

「なるほど、そこがあの娘の弱味だて」と医者は言った。「まあ、わしの力のおよぶかぎり、あらゆる療法をほどこしてみよう。だが、患者が自分の葬式にくる車の数をかぞえはじめたら、医薬の効能は五割がた減じるものと思わなければならん。あんたが、あの患者に、この冬の外套の袖の新型について質問させるようにしむけることができたら、見込みは十に一つではなく、五つに一つと保証してもよい」

医者が帰ってから、スウは仕事部屋へ行って、日本製のナプキンがぐしょぐしょになるまで泣いた。それから、画板をかかえると、ジャズを口笛で吹きながら、威勢よくジョンジーの部屋へ入って行った。

ジョンジーは、ほとんど掛け蒲団に皺ひとつ寄せずに、窓のほうを向いて寝ていた。彼女が眠っているものと思って、スウは口笛をやめた。

スウは画板をすえると、雑誌小説の挿絵のペン画を描きはじめた。若い画家は、若い作家が文学への道を切り開いて行くために書く雑誌小説の挿絵を描くことによって、絵画への道を切り開いて行かなければならないのである。

スウが、小説の主人公であるアイダホのカウボーイの姿の上に、馬匹共進会用の派手な乗

馬ズボンと片眼鏡を描いていると、ジョンジーが低い声で何度もくりかえすのがきこえた。スウは急いでベッドのところへ近づいた。

ジョンジーの目は大きく見開かれていた。窓の外を見ながら彼女は数をかぞえていた――数を逆にかぞえているのであった。

「十二」と言って、すこしたってから「十一」それから「十」「九つ」それから、ほとんど同時に「八つ」「七つ」……

スウは気になって窓の外を見た。何をかぞえているのだろう？　見えるものといえば、殺風景な薄暗い中庭と、二十フィート離れた煉瓦づくりの隣の建物の窓も何もない壁だけであった。根っこが節くれだって朽ちかけている一本の古い古い蔦のつるが、その煉瓦の壁の中ほどまで這いのぼっていた。つめたい秋の風が、つるから葉をはたき落して、骸骨のような枝が、ほとんど裸になって、崩れかかった煉瓦にしがみついていた。

「ねえ、何なの？」スウはたずねた。

「六つ」とジョンジーは、ささやくような声で言った。「だんだん落ちるのが早くなったわ。三日前には、まだ百くらいあったのよ。かぞえていると頭が痛くなるくらいだったわ。でも、いまは楽よ。あら、また一つ落ちたわ。あと五つしかないわ」

「何が五つなの？　ねえ、わたしにも教えてよ」

「葉っぱよ。蔦のつるについている葉っぱ。最後の一葉が落ちたら、わたしも行かなきゃならないんだわ。三日前からわかっていたのよ。先生も、そうおっしゃらなかった？」

「まあ、そんなばかげたことは聞いてないわ」とスウは、ひどく軽蔑した口調で、叱るように言った。「蔦の枯葉と、あんたの病気がよくなることと、どんな関係があるの？　そういえば、あんたは、あの蔦がとても好きだったわね。でも、あまりばかげたことをいうもんじゃないわ。お医者さんも、今朝、おっしゃっていたわ、あんたがどんどんよくなる見込みは――ええと、お医者さんは、どんな言い方をしたっけ？――そう、よくなる見込みは一つに十だと言ってたわ。それなら、このニューヨークで、市電に乗っても、新築工事中のビルのそばを歩いてても、危険率は同じことよ。さあ、スープをすこし飲んでみない？　そして、わたしに絵をつづけさせてよ。絵ができたら、編集者から金をもらって、病気の赤ちゃんにはポートワインを、食いしんぼのわたしにはポークチョップを買ってこられるんだから」

「もうポートワインなんか買う必要ないわ」ジョンジーは目を窓の外にすえたまま言った。「また一枚落ちたわ。いいえ、スープなんか、ほしくないわ。これで、あとたった四枚だけよ。暗くならないうちに最後の一葉が落ちるのを見たいわ。そしたら、わたしも行くんだわ」

「ねえ、ジョンジー」とスウは彼女の上に身をかがめて言った。「わたしが絵を描いてしまうまで、目をつぶっていて、窓の外は見ないと約束してくれない？　あの絵は、明日までに渡さなきゃならないのよ。わたしは光線が必要なの。それでなかったら、シェードをおろしてしまいたいところだけれど――」

「向うの部屋では描けないの？」ジョンジーは冷やかに言った。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com